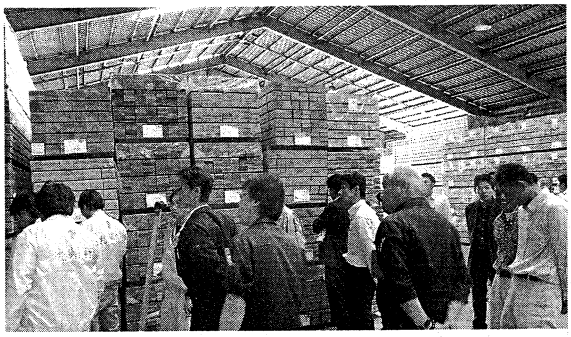
2015年（平成27年）10月29日（木）日刊木材新聞

「九州材」販路開拓目指す

県産材の枠を超えて

第３回九州材フェア

第3回九州材フェアが21日、大分県木材協同組合連合会小倉市場（北九州市小倉南区）で開かれた。九州各県が県産材の枠を超え「九州材」として、高品質商品を安定供給することで、新たな需要開拓を目指す取り組みだ。



即売会では、担当者が「九州材」のプリント付ジャージを着て、せりをした

同フェアは九州木材一連が主催し九州地方知市場連合会、大分県木一事会、ＪＡＰＩＣ、九州経済連合会などが後援した。北部九州のほか、中国・関西・中京圏など広域から買い方を招き、九州材ブランドをＰＲする展示や即売会などを実施した。

九州各県の行政関係者や木材関係団体、製材・加工業者などを含め１５０人ほどが参加。各県のブースでは、熊本県が杉・桧の壁板や床板などの内装材を出展し商談が行われた。

九州材の即売は、製材メーカー50社から３０００立方㍍が出材された。製品相場は原木の相場が高い割に価格は上がっていない。当日も値段は現状維持のまま品質の高い物から手当てされていた。相場は、杉柱角ＫＤ材が４万７０００円（立方㍍）、間柱ＫＤ材は４万５０００円。桧土台角ＫＤ材５万２０００円前後。

式典では内田幹雄大分県木連理事長が「豊富な木材資源を背景に、九州の各地に大型の木材加工工場が立地し、製品の供給能力も飛躍的に向上している。今後、国産材製品が真に住宅業界に信頼されるかは、品質の高い物を安定供給できるかにかかっている」とあいさつした。

続いて産地からの情報提供として、井川彰井上林産社長が素材生産の現状、西胤謙吉山佐木材技術本部企画係長がＣＬＴ（直交集成板）の取り組みを報告した。井川氏は、最近立木代が上がっており、素材業としては競争が激しくなり取り合いと表現してもいい状況で推移していると説明した。また皆伐について、伐採したら必ず植えることが一番大事だとし「木材供給の川上から川下まで一体となり、真剣に森林整備に取り組んでいかなければならない」と話した。西胤氏は「基準強度や燃えしろ設計などが今年度から来年度にかけて整備されていく見込みだ。新しい木材の用途として注目されている」と話した。